

井の国歴史懇話会報

VOL. 3

発行：井の国歴史懇話会事務局 発行日 平成 25 年 6 月 24 日



本格的に活動再開 多数の参加者で会場は満席

第2回講話

「地域から見た家康の遠州入り」

講師 夏目琢史

はじめに

「歴史」は、とって身近なものです。小学校や中学校、道路や橋、山や川にも無数



の「歴史」が存在しています。そして、こうした「歴史」が集積している「場」が、地域社会には必ずあるものです。引佐におけるその一つが、井伊谷龍潭寺だと思います。私たちは、この龍潭寺に眠る古文書を紐解き、新たな「歴史」の発見をめざしました。その一端を紹介します。

江戸時代の井伊谷龍潭寺

江戸時代の井伊家は、井伊谷の龍潭寺と大変親密でありました。龍潭寺は井伊家の菩提寺でしたが、江戸時代、井伊家は近江彦根の藩主となったため、故郷の井伊谷とはだいぶ遠距離になっていました。江戸時代は長かった。ふつうだったら、百年や二百年もすれば故郷のことなんて忘れてしまうはずですが、しかし、井伊家と井伊谷の関係はそうなりません。それどころか井伊直政の没後百年を越えると、ますます関係は深まり、ついには井伊家の殿様御自ら井伊谷を訪れるようになりました。井伊家は大老職をつとめる幕閣の超VIP。当時の井伊谷の人びとは大慌てで準備している様子が、古文書のなかにはっきりと記されています。

では、どうして井伊家と井伊谷はこれほどつながりが深かったのでしょうか。その答えは、歴代の龍潭

寺住職たちが、井伊谷の歴史を熱心に調べていたことが、関連していると思います。江戸時代の龍潭寺の住職は、井伊家の藩士たちと「歴史」について語り合い、武士と僧侶という身分を超えた親密な交流がありました。井伊家の役人たちも自分の先祖の活躍を知りたい。江戸時代の龍潭寺住職たちはこの気持ちによく答えました。龍潭寺の住職たちがもっていた「歴史」についての知識が、井伊家の人びとを動かしたのです。

家康遠州入りの記憶

では、江戸時代の龍潭寺住職をはじめとした井伊谷周辺の知識人たちは、どんなことに興味をもっていたのでしょうか。その代表的な一つが、「徳川家康の遠州入り」です。

永禄11年12月の家康遠州入りは、当時の浜松の人たちにとって衝撃的な出来事でした。それは、その当時の人よりもむしろ江戸時代に生きた彼らの子孫たちにとって衝撃的でした。というのもご存知のように、この後、家康は天下を統一し、江戸に幕府を開きます。家康は天下をとる前の十七年を浜松城で暮らしましたから、浜松周辺の多くの人と接しました。遠州の人たちにとってこの時のことは、極めて重要であり、子々孫々にまで伝えられていきます。「俺の先祖は家康公が遠州に来たときから〇〇だった」という言葉が、江戸時代の浜松の古文書にたくさん残っています。おそらく当時の子供たちはご先祖から何遍も同じことを口酸っぱく聞かされたでしょう。だからこそ、家康の遠州入りの「歴史」は、四百年以上も経った現在にまで伝えられてきたのです。家康遠州入りに関心が集まっていた証拠として、そのルートについて、いろんな説が生まれたことがあげられます。江戸時代の井伊谷二宮神社の神主中井直恕は、家康遠

州入りのルートに関する説をいろいろと調べ、その説が多いことに大変悩んでおります。龍潭寺でも、幕府が編纂した歴史書などを熱心に書き写すなど、家康の遠州入りについて熱心に調べていました。「家康の遠州入り」は、江戸時代の遠州の知識人たちにとって、共通の重要なテーマであったのです。

おわりに

龍潭寺の古文書から新たに発見された事実は、とてもここでは書き尽くせません。ですが、身近なところにまだまだ「歴史」が眠っていることは間違いありません。書かれない記憶は忘れ去られます。変な話、20年前の自分は既に「歴史」の対象です。「歴史」は、教科書に載るような大人物だけが主役なのではありません。ふつうの人々にも「歴史」はあります。それぞれの地域には、それぞれのかけがえのない「歴史」があります。地域に眠る大量の古文書や資料から、今まで忘れ去られていた人々の人生を掘り起こしていく仕事。江戸時代の遠州の人々が熱心に勉強してきた、そんな「歴史」という仕事に、僕は大変魅力を感じます。

龍潭雑記 1

龍潭寺住職 武藤宗甫

龍潭寺住職に就任してはや、1年がたちました。まだまだ、新参者です。勉強のつもりで龍潭寺でのあれこれを書きしるしたいとの思いから「龍潭雑記」といたしました。

「井伊家伝記」



平成25年の春の「新緑さつき祭り」特別展示で上下2冊を展示いたしました。井伊家展として、井伊家霊屋の公開・宝物展示等、約2か月新緑の時期に行っております。そのメインにしたのが「井伊家伝記」です。

龍潭寺は350年来、火災・戦火にあっておりませんので、建物・古文書が千点ほど残っています。この調査に入って下さったのが4月にお招きした夏目琢史氏です。夏目氏とは小学生時代から井伊家を取り扱くださり、以来20年来の付き合いです。発表の中で特に龍潭寺の古文書の中で貴重なものの一つに挙げてくれたのが「井伊家伝記」です。

祖山和尚*が享保十五年(1730)四月に誌した当地における井伊家の歴史書で、井伊家が直政以降彦根に転封し、120余年の時がたち井伊谷における井伊氏の事跡が風化していくことに強い危機感もち、筆を執ったと思われます。

特に戦国期の井伊氏受難の時代、井伊直政の出世につき多くの紙面を扱っています。

興味深いのは井伊直政が井伊家17代と表記され、彦根で編纂された系図では24代になっています。これは、南北朝時代に南朝を加勢したということで戦犯に処され、7代系図から抹消されたのではないかと推察されます。

* 龍潭寺第九代祖山和尚＝祖山法忍和尚

寛文十二年(1672)～元文四年(1740)。歴代の住職の中でも特に優れた方で、妙心寺の管長に就任、正徳元年(1714)に八幡宮・享保元年(1716)稲荷堂・享保十四年(1729)に大仏殿(釈迦堂)をそれぞれ建立。また、おば^{すいしんいん}綏心院(東山天皇の女官を務めた方)より東山天皇(宝永6没)の遺品5点を頂戴する。

全部の古文書の編纂につきましてはとても解読できておりませんが、これからも皆様から教えていただきながら勉強が続けていけたらと考えております。

次回のお知らせ (敬称略)

8月26日(月) 13:30～

講話 「浜松の山城」

講師 浜松市文化財課長 佐野和夫

講話「三方原合戦の前哨戦仏坂の合戦」

講師 熊谷光夫

10月22日(月)

現地研修 「龍潭寺住職と歴史にふれる旅②」